

第185期 交付書面省略事項

(2022年4月1日～2023年3月31日)

財産および損益の状況の推移

主要拠点等

従業員の状況

主要な借入先

会計監査人の状況

業務の適正を確保するための体制およびその体制の運用状況の概要

株式会社の支配に関する基本方針

連結持分変動計算書

<ご参考>連結包括利益計算書(未監査)

<ご参考>連結キャッシュ・フロー計算書(未監査)

連結注記表

株主資本等変動計算書

個別注記表

日本電気株式会社

上記事項につきましては、法令および当社定款第14条の規定に基づき、書面交付請求をされた株主さまに対して交付する書面には記載しておりません。

財産および損益の状況の推移

① NECグループの財産および損益の状況の推移

(IFRS)

区分	年度	2019年度(第182期)	2020年度(第183期)	2021年度(第184期)	2022年度(第185期)
売上収益 (億円)		30,952	29,940	30,141	33,130
営業利益 (億円)		1,276	1,538	1,325	1,704
調整後営業利益 (億円)		1,458	1,782	1,710	2,055
税引前利益 (億円)		1,240	1,578	1,444	1,677
親会社の所有者に帰属する当期利益 (億円)		1,000	1,496	1,413	1,145
親会社の所有者に帰属する調整後当期利益 (億円)		1,112	1,654	1,672	1,386
基本的1株当たり当期利益 (円)		385.02	557.18	518.54	424.51
調整後1株当たり当期利益 (円)		428.32	615.92	613.79	513.68
資産合計 (億円)		31,233	36,686	37,617	39,841
親会社の所有者に帰属する持分 (億円)		9,107	13,082	15,135	16,238

(注) 「基本的1株当たり当期利益」は、国際会計基準(IAS)第33号「1株当たり利益」を適用し、期中平均株式数に基づき算出しています。

② 当社の財産および損益の状況の推移

区分	年度	2019年度(第182期)	2020年度(第183期)	2021年度(第184期)	2022年度(第185期)
売上高 (億円)		17,897	17,055	16,644	17,756
経常利益 (億円)		645	663	285	712
当期純利益 (億円)		388	1,644	822	1,021
1株当たり当期純利益 (円)		149.60	612.27	301.71	378.57
総資産 (億円)		21,002	23,961	23,217	24,318
純資産 (億円)		7,194	9,289	9,763	10,171

(注) 「1株当たり当期純利益」は、期中平均株式数に基づき算出しています。

主要拠点等

本 社	東京都港区	
支 社	北海道支社（札幌市） 関東甲信越支社（さいたま市） 東海支社（名古屋市） 関西支社（大阪市） 四国支社（高松市）	東北支社（仙台市） 神奈川支社（横浜市） 北陸支社（金沢市） 中国支社（広島市） 九州支社（福岡市）
事 業 場	玉川事業場（川崎市） 相模原事業場（相模原市）	府中事業場（東京都府中市） 我孫子事業場（我孫子市）
国内生産拠点	日本航空電子工業株式会社（昭島市等） 株式会社オーシーシー（北九州市等）	NECネットワーク・センサ株式会社（日高市等） NECプラットフォームズ株式会社（掛川市等）
海 外 拠 点	NECコーポレーション・オブ・アメリカ社（米国） NECアジア・パシフィック社（シンガポール） NECラテン・アメリカ社（ブラジル）	NECヨーロッパ社（英国） 日電（中国）有限公司（中国）

従業員の状況

① NECグループの従業員の状況

セグメント名	従業員数
社会公共事業	7,074名
社会基盤事業	18,021名
エンタープライズ事業	6,851名
ネットワークサービス事業	10,673名
グローバル事業	27,041名
その他	48,867名
合計	118,527名

② 当社の従業員の状況

従業員数	前期末比増(減)	平均年齢	平均勤続年数
22,036名	686名	43.5歳	18.1年

主要な借入先

(単位 百万円)

借入先	借入金残高
(株)三菱 UFJ 銀行	33,810
(株)三井住友銀行	31,873
(株)日本政策投資銀行	18,158
(株)みずほ銀行	14,661
三井住友信託銀行(株)	12,456

会計監査人の状況

(1) 会計監査人の名称 有限責任 あずさ監査法人

(2) 会計監査人に対する報酬等の額

(単位 百万円)

	支払額
① 当社が支払うべき会計監査人としての報酬等の額	569
② 当社および当社の子会社が会計監査人に対して支払うべき金銭その他の財産上の利益の合計額	1,173

- (注)1. 当社と会計監査人との間の監査契約においては、会社法に基づく監査の報酬等と金融商品取引法等に基づく監査の報酬等とを区分しておらず、また実質的にも区分できないため、①の報酬等の額には金融商品取引法等に基づく監査の報酬等の額が含まれています。
2. 監査役会は、CFO（チーフフィナンシャルオフィサー）、社内関係部門および会計監査人から必要な情報を入手し報告を受けて、監査計画の内容および報酬見積り算出根拠等の妥当性に関し、前期の監査実績も含めて評価・検討を行った結果、会計監査人の報酬等の額について、会社法第399条第1項の同意を行っています。
3. 事業報告の「1. (7) ②重要な子会社の状況」に記載された子会社のうち、当社の会計監査人以外の公認会計士または監査法人の監査を受けている会社は、次のとおりです。

会社名	監査法人
日本航空電子工業㈱	EY 新日本有限責任監査法人
NEC コーポレーション・オブ・アメリカ社	KPMG リミテッド・ライアビリティ・パートナーシップ
NEC ヨーロッパ社	KPMG リミテッド・ライアビリティ・パートナーシップ
NEC アジア・パシフィック社	KPMG リミテッド・ライアビリティ・パートナーシップ
日電（中国）有限公司	KPMG ファーゼン
NEC ラテン・アメリカ社	KPMG アウディトーレス・インデペンデンス
ネットクラッカー・テクノロジー社	KPMG リミテッド・ライアビリティ・パートナーシップ
ガーデン・プライベート・ホールディングス社	KPMG リミテッド・ライアビリティ・パートナーシップ
ソレイユ社	KPMG パートナー・セルスカブ

(3) 非監査業務の内容

当社は、2022年度（当期）において、会計監査人に対し、公認会計士法第2条第1項の業務のほか、「業務委託に係る統制リスクの評価」に係る業務、各種アドバイザリー業務などを委託しました。

(4) 会計監査人の解任または不再任の決定の方針

監査役会は、会計監査人が会社法第340条第1項各号のいずれかに該当すると認められる場合、監査役全員の同意に基づき会計監査人を解任します。この場合、監査役会が選定した監査役は、解任後最初に招集される株主総会において、解任した旨およびその理由を報告します。また、監査役会は、会計監査人にその職務を適切に遂行することが困難であると認められる事態が生じ変更が相当と認められる場合、または、会計監査人の監査の適正性もしくは効率性の向上等のために変更が相当と認められる場合、株主総会に提出する会計監査人の解任または不再任に関する議案の内容を決定します。

業務の適正を確保するための体制およびその体制の運用状況の概要

(業務の適正を確保するための体制)

当社は、取締役会において決定した会社法第 362 条第 4 項第 6 号に定める会社の業務の適正を確保するための体制の整備に関する基本方針に基づき、内部統制システムを整備し運用しています。本基本方針の内容の概要は、次のとおりです。

当社は、本基本方針に基づく内部統制システムの整備・運用状況を絶えず評価し、必要な改善措置を講じるほか、本基本方針についても、経営環境の変化等に対応して不断の見直しを行い、一層実効性のある内部統制システムの整備・運用に努めます。

- ① 取締役、執行役員および使用人の職務の執行が法令および定款に適合することを確保するため、取締役および執行役員は、NECグループにおける企業倫理の確立ならびに法令、定款および社内規程の遵守の確保を目的として制定した「NECグループ行動規範」(Code of Conduct) を率先垂範するとともに、その周知徹底をはかり、これらの違反が判明した場合には、その原因を究明したうえで再発防止策を策定し、実行する。また、内部通報制度「コンプライアンス・ホットライン」の利用を促進する。
- ② 情報の保存および管理は、適用ある法令および社内規程に従って、適正に行う。
- ③ リスク管理は、社内規程に基づき、NECグループとして一貫した方針のもとに、効率的かつ総合的に実施する。事業に関するリスク管理は、事業部門が適切に実施し、スタッフ部門がこれを支援する。経営上の重要なリスクへの対応方針その他リスク管理の観点から重要な事項については、十分な審議を行うほか、特に重要なものについては取締役会において報告する。
- ④ 取締役の職務執行の効率性を確保するため、取締役会は、執行役員に対して大幅な権限委譲を行い、迅速な意思決定および機動的な職務執行を推進する。執行役員は、取締役会の監督のもと、中期経営目標および予算に基づき効率的な職務執行を行う。
- ⑤ 当社は、NECグループにおける業務の適正を確保するため、「NECグループ経営ポリシー」を通じて、子会社の遵法体制その他業務の適正を確保するための体制の整備に関する指導および支援を行う。NECグループにおける経営の健全性および効率性の向上をはかるため、各子会社について、取締役および監査役を必要に応じて派遣するとともに、当社内に主管部門を定めることとし、当該主管部門は子会社の事業運営に関する重要な事項について子会社から報告を受け、子会社におけるリスク管理について子会社を指導および支援する。内部監査部門は、NECグループの業務の適正性について監査を行う。ただし、内部監査部門を有する子会社については、当該部門と連携して監査を行う。監査役は、監査に関して子会社監査役と意見交換等を行い、連携をはかる。
- ⑥ NECグループにおける業務の適正化および効率化の観点から、業務プロセスの改善および標準化に努めるとともに、情報システムによる一層の統制強化をはかる。
- ⑦ NECグループにおける財務報告に係る内部統制については、適用ある法令に基づき、評価、維持、改善等を行う。
- ⑧ 監査役の職務遂行を補助する専任スタッフを置き、その人事考課、異動、懲戒等について

は、監査役の承認を要するものとする。

- ⑨ 取締役、執行役員および使用人は、随時、その職務の執行状況等について監査役に報告する。また、当社は、子会社の取締役、監査役、執行役員および使用人が、随時、その職務の執行状況等について監査役に報告するよう指導する。
- ⑩ 監査役は、監査の実効性を確保するため、監査役会を開催し、監査実施状況等について情報の交換および協議を行うとともに、会計監査人から定期的に会計監査に関する報告を受け、意見交換を行う。

(業務の適正を確保するための体制の運用状況の概要)

当社は、当期の内部統制システムの整備・運用状況について評価を行い、本基本方針に基づき内部統制システムが適切に整備され運用されていることを確認しました。なお、この過程において、監査役とも、内部統制システムの整備・運用状況について意見交換を行っています。当期における主な取り組みは、次のとおりです。

コンプライアンスについては、「NECコンプライアンスの日」(2016年度に国内において独占禁止法違反行為があった旨の認定を受けたことを踏まえ、NECグループの従業員一人ひとりがコンプライアンスの重要性を再確認する日として2017年に制定)を中心として、NECグループの従業員一人ひとりがコンプライアンスの重要性を再確認するための施策を実施しました。具体的には、当社の執行役員社長や企業のコンプライアンスに精通した外部弁護士による講演、過去の独占禁止法違反事案の風化防止と従業員のコンプライアンス意識のさらなる向上を目的とした同事案に関する記憶継承インタビューのライブ配信、コンプライアンスやリスクマネジメントに関するさまざまな教育コンテンツのウェビナーでの配信に加え、コンプライアンスの推進に向けて顕著な取り組みを行った事業部門および海外子会社の表彰、当社の経営幹部、部門長、国内および海外子会社社長による事業活動における倫理観の重要性やコンプライアンスの徹底に関するメッセージの発信などを行いました。また、当社は、NECグループにおけるコンプライアンス推進活動の強化を目的としたコンプライアンス推進会議を定期的で開催しており、主要な国内子会社に対してコンプライアンスの推進に向けた当社の活動状況、来期の重点対策リスク(その影響度と対策の必要性の観点からNECグループ全体で新たな対策や既存の対策に改善を講ずべきリスク)等の情報を共有することに加え、NECグループにおけるコンプライアンス推進活動の強化に向けた意見交換を実施しています。毎年実施しているコンプライアンスに関するウェブ教育の中では、当社の従業員一人ひとりがコンプライアンスを徹底する旨とコンプライアンスをNECグループの文化とするために自らが取り組む行動を宣言しました。さらに、当社は「コンプライアンス・ホットライン」への相談・申告(内部通報)を促進することで不正行為等の早期発見および早期解決をはかっています。また、「コンプライアンス・ホットライン」に加え、ハラスメントや人権に関する相談を匿名で行うことができる「人権ホットライン」(現HRホットライン)や、海外子会社の経営幹部が関与する不正行為等の早期発見および早期解決をはかることを目的とした海外子会社の従業員向けの「グローバル・ホットライン」を設置し、運用しています。なお、「コンプライアンス・ホットライン」

および「人権ホットライン」の当期の利用実績は253件であり、申告のあった内部通報や相談については、その内容に応じて内部監査部門その他の社内関係部門において調査を行い、必要な対策を講じています。

リスクマネジメントについては、当社は、リスクマップ（NECグループとして認識するリスクを網羅的にとりまとめたリスク一覧をもとに、影響度と切迫性の観点からリスクアセスメントを実施し、リスクの重要度を可視化したもの）を作成しており、当期は、当該リスクマップを踏まえて、重点対策リスクとして「バリューチェーン上における人権侵害リスク」を選定しました。重点対策リスクへの対応方針については、リスク・コンプライアンス委員会および経営会議で審議のうえ実行し、その結果を取締役に報告しました。「バリューチェーン上における人権侵害リスク」に係る取り組みとして、2015年に策定した「NECグループ人権方針」を改定し、NECグループのバリューチェーン全体にわたる人権の尊重に対する経営トップのコミットメントとガバナンス体制を明確化しました。当社が顕著な人権課題として認識している「AIなどの新技術と人権」、「地政学的情勢や紛争影響をふまえた人権リスク」、「サプライチェーン上の労働」および「従業員の安全と健康」のうち、当期は、「地政学的情勢や紛争影響をふまえた人権リスク」への対応として、ハイリスク国・地域の事業における人権影響評価とリスク軽減施策を実行し、その結果を取締役に報告しました。当社では、コンプライアンス違反事案が発生した場合には、リスク・コンプライアンス委員会に報告される体制としており、その事案の概要については、当月の取締役会で報告するなど、取締役会への迅速な情報共有をはかっています。また、事業部門長がオーナーシップを持って自部門のコンプライアンスリスクの特性に応じた適切な施策を策定・実施する体制としており、コンプライアンス推進部は、事業部門長の選定したコンプライアンスリスクおよび年間改善計画ならびにその進捗状況・実績を定期的に確認し、必要に応じて取り組みを支援しています。

グループマネジメントについては、NECグループのグループマネジメントについて定めた「NECグループ経営ポリシー」に基づき、子会社経営の仕組みの統一をはかり、グループ全体最適とグループ企業価値の最大化に努めています。その一環として、海外子会社に対するグループ共通のポリシーや業務プロセス・基盤の導入を迅速に行えるよう、主要なグループ横断機能を担当する当社のチーフオフィサーが自らの担当領域について、海外子会社における業務の遂行を管理する仕組みの整備を進めています。

監査役による監査については、監査役は、当社および子会社の取締役、執行役員および使用人から職務執行状況等について随時報告を受けるほか、内部監査部門から内部監査の状況（内部監査の結果を含む。）に加え、「コンプライアンス・ホットライン」および子会社の内部通報制度の運用状況について定期的に報告を受けるとともに、人事総務部から「人権ホットライン」の運用状況について適宜報告を受けています。また、監査役は、会計監査人から定期的に会計監査に関する報告を受け意見交換を実施するほか、会計監査人および内部監査部門との三者協議を定期的に実施することなどにより、密接な連携に努めています。さらに、内部通報制度を強化するため、当社の役員が関係する不正行為等を監査役に対して直接通報できる窓口として、当社の役員から独立した監査役ホットラインを設置し、運用しています。

株式会社の支配に関する基本方針

当社は、当社の財務および事業の方針の決定を支配する者の在り方は、株主のみなさまが最終的に決定するものと考えています。一方、経営支配権の取得を目的とする当社株式の大量買付行為や買収提案があった場合には、買収提案に応じるか否かについての株主のみなさまの判断のため、買収提案者に対して対価等の条件の妥当性や買付行為がNECグループの経営方針や事業計画等に与える影響などに関する適切な情報の提供を求めるとともに、それが当社の企業価値および株主共同の利益の向上に寄与するものであるかどうかについて評価、検討し、速やかに当社の見解を示すことが取締役会の責任であると考えています。また、状況に応じて、買収提案者との交渉や株主のみなさまへの代替案の提示を行うことも必要であると考えます。

当社は、現在、買収提案者が出現した場合の対応方針としての買収防衛策をあらかじめ定めていませんが、買収提案があった場合に、買収提案者から適切な情報が得られなかったとき、株主のみなさまが買収提案について判断をするための十分な時間が与えられていないときまたは買付行為が当社の企業価値および株主共同の利益の向上に反すると判断したときには、その時点において実行可能で、かつ株主のみなさまに受け入れられる合理的な対抗策を直ちに決定し、実施する予定です。

連結持分変動計算書

(2022年4月 1日から
2023年3月31日まで)

(単位 百万円)

	親会社の所有者に帰属する持分						非支配分	資本合計
	資本金	資本金 剰余金	利益 剰余金	自己株式	その他の 資本の 構成要素	合計		
2022年4月1日 残高	427,831	169,090	678,653	△1,906	239,835	1,513,503	273,139	1,786,642
当期利益			114,500			114,500	17,016	131,516
その他の 包括利益					58,101	58,101	7,169	65,270
包括利益			114,500		58,101	172,601	24,185	196,786
自己株式の 取得				△30,547		△30,547		△30,547
自己株式の 処分		1		865		866		866
配当金			△28,549			△28,549	△8,739	△37,288
子会社に 対する所有者 持分の変動		△4,057				△4,057	322	△3,735
所有者との 取引額合計	—	△4,056	△28,549	△29,682	—	△62,287	△8,417	△70,704
2023年3月31日 残高	427,831	165,034	764,604	△31,588	297,936	1,623,817	288,907	1,912,724

(ご参考)

連結包括利益計算書（未監査）

（ 2022年4月 1日から
2023年3月31日まで ）

（単位 百万円）

科 目	金 額
当 期 利 益	131,516
その他の包括利益（税引後）	
純損益に振り替えられることのない項目	
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する 資 本 性 金 融 商 品	△10,747
確 定 給 付 制 度 の 再 測 定	23,123
持 分 法 に よ る そ の 他 の 包 括 利 益	△43
純損益に振り替えられることのない項目合計	12,333
純損益に振り替えられる可能性のある項目	
在 外 営 業 活 動 体 の 換 算 差 額	52,009
キ ャ ッ シ ュ ・ フ ロ ー ・ ヘ ッ ジ	119
持 分 法 に よ る そ の 他 の 包 括 利 益	809
純損益に振り替えられる可能性のある項目合計	52,937
税 引 後 そ の 他 の 包 括 利 益	65,270
当 期 包 括 利 益	196,786
当 期 包 括 利 益 の 帰 属	
親 会 社 の 所 有 者	172,601
非 支 配 持 分	24,185
当 期 包 括 利 益	196,786

(ご参考)

連結キャッシュ・フロー計算書（未監査）

（ 2022年4月 1日から
2023年3月31日まで ）

(単位 百万円)

科 目	金 額
営業活動によるキャッシュ・フロー	
税引前利益	167,671
減価償却費及び償却費	183,298
減損損失	6,857
引当金の増減額（△は減少）	△8,173
金融資産の増減額	△10,899
金融負債の増減額	17,624
持分法による投資損益（△は益）	△3,949
営業債権及びその他の債権の増減額（△は増加）	△77,305
契約資産の増減額（△は増加）	△46,278
棚卸資産の増減額（△は増加）	△23,428
営業債務及びその他の債務の増減額（△は減少）	41,114
契約負債の増減額（△は減少）	16,522
その他の（純額）	△72,837
小 計	190,217
利息の受取額	3,038
配当金の受取額	3,697
利息の支払額	△7,418
法人所得税の支払額	△37,407
営業活動によるキャッシュ・フロー	152,127
投資活動によるキャッシュ・フロー	
有形固定資産の取得による支出	△56,391
有形固定資産の売却による収入	12,387
無形資産の取得による支出	△21,323
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する 資本金性金融商品の取得による支出	△2,094
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する 資本金性金融商品の売却による収入	19,182
子会社の取得による支出	△6,935
子会社の売却による収入	9,679
関連会社または共同支配企業に対する投資の取得による支出	△198
関連会社または共同支配企業に対する投資の売却による収入	1,951
その他の（純額）	△5,849
投資活動によるキャッシュ・フロー	△49,591
財務活動によるキャッシュ・フロー	
短期借入金の純増減額（△は減少）	△39,978
長期借入れによる収入	40,000
長期借入金返済による支出	△49,550
社債の発行による収入	110,000
社債の償還による支出	△55,000
リース負債の返済による支出	△60,879
配当金の支払額	△28,522
非支配持分への配当金の支払額	△8,733
自己株式の処分による収入	865
自己株式の取得による支出	△30,547
その他の（純額）	△442
財務活動によるキャッシュ・フロー	△122,786
現金及び現金同等物に係る為替変動による影響	8,934
現金及び現金同等物の増減額（△は減少）	△11,316
現金及び現金同等物の期首残高	430,778
現金及び現金同等物の期末残高	419,462

連結注記表

I 連結計算書類の作成のための基本となる重要な事項に関する注記等

1. 連結計算書類の作成基準

当社の連結計算書類は、会社計算規則第120条第1項の規定により、国際財務報告基準（以下「IFRS」という。）に準拠して作成しています。

なお、同項後段の規定により、IFRSにより求められる開示項目の一部を省略しています。

2. 連結の範囲に関する事項

連結子会社の数 284社

主要な連結子会社

NECプラットフォームズ(株)、NECフィールドディング(株)、NECソリューションイノベータ(株)、アビームコンサルティング(株)、NECネッツエスアイ(株)、日本航空電子工業(株)、NECコーポレーション・オブ・アメリカ社、NECヨーロッパ社、NECアジア・パシフィック社、日電（中国）有限公司、NECラテン・アメリカ社、ネットクラッカー・テクノロジー社、コメット・ホールディング社、ガーデン・プライベート・ホールディングス社、ソレイユ社

当連結会計年度の連結範囲の異動は、増加6社、減少11社で、主な増減は次のとおりです。

取得・設立等により、連結子会社とした会社の数 6社

清算・売却等により、減少した会社の数 9社

合併により、減少した会社の数 2社

3. 持分法の適用に関する事項

持分法適用会社の数

持分法を適用した関連会社の数 56社

主要な会社名

レノボNECホールディングス社、NECキャピタルソリューション(株)

当連結会計年度の持分法適用会社の異動は、増加が3社、減少が4社です。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準および評価方法

① 金融資産

金融資産の分類

非デリバティブ金融資産を償却原価で測定する区分、その他の包括利益を通じて公正価値で測定する区分及び純損益を通じて公正価値で測定する区分に分類します。分類は、原則として金融資産を管理している事業モデル及び金融資産の契約上のキャッシュ・フローの特徴に基づいて行っています。

(a) 非デリバティブ金融資産

償却原価で測定する金融資産

当社グループが保有する金融資産のうち、次の条件がともに満たされる場合には、償却原価で測定する金融資産に分類します。

- ・契約上のキャッシュ・フローを回収するために金融資産を保有することを目的とする事業モデルの中で保有されている。
- ・金融資産の契約条件により、元本及び元本残高に対する利息の支払のみであるキャッシュ・フローが所定の日に生じる。

当初認識時、公正価値に直接取引費用を加算して測定します。なお、重大な金融要素を含まない営業債権については取引価格によって測定します。当初認識後、償却原価で測定する金融資産の帳簿価額については実効金利法による償却原価から減損損失を控除した金額で測定します。実効金利法による償却および認識が中止された場合の利得または損失は、当期の純損益に認識します。

その他の包括利益を通じて公正価値で測定する資本性金融商品

当社グループは、原則として、ベンチャーキャピタル等への投資を除き、公正価値の事後の変動をその他の包括利益に表示するという選択を行っています。その他の包括利益を通じて公正価値で測定する資本性金融商品は、当初認識時、公正価値に直接取引費用を加算して測定し、当初認識後は公正価値で測定します。公正価値の変動はその他の包括利益に含めて認識し、純損益に振り替えることはありません。また、当社グループは、その他の包括利益に累積された金額をその後利益剰余金に振り替えることはありません。なお、その他の包括利益を通じて公正価値で測定する資本性金融商品からの配当金については、配当金が明らかに投資原価の一部の回収である場合を除き、金融収益として純損益に認識します。

純損益を通じて公正価値で測定する金融資産

上記の償却原価で測定する金融資産およびその他の包括利益を通じて公正価値で測定する資本性金融商品以外の金融資産は、純損益を通じて公正価値で測定する金融資産に分類します。

純損益を通じて公正価値で測定する金融資産は、当初認識後も公正価値で測定し、その変動は純損益で認識します。また、純損益を通じて公正価値で測定する金融資産にかかる利得または損失は、純損益に認識します。

(b) デリバティブ金融商品

当社グループは、為替リスクおよび金利リスクをヘッジする目的で、為替予約、金利スワップ、通貨オプション等のデリバティブを利用します。デリバティブは公正価値で当初認識し、その後も公正価値で再測定されます。

ヘッジ手段として指定されないデリバティブ

ヘッジ手段として指定されないデリバティブの公正価値の変動は、純損益で認識します。

ヘッジ手段として指定されたデリバティブ

キャッシュ・フロー・ヘッジ

デリバティブの公正価値の変動のうち、有効部分はその他の包括利益で認識され、非有効部分は、直ちに純損益で認識されます。その他の資本の構成要素に累積された金額は、ヘッジ対象のキャッシュ・フローが純損益に影響を与えるのと同じ期に、純損益に振り替えられます。ヘッジ手段が失効、売却、終了または行使された場合、ヘッジ会計の要件をもちや満たしていない場合、予定取引の発生がもはや見込まれない場合または指定を取り消した場合は、キャッシュ・フロー・ヘッジによるヘッジ会計を将来に向かって中止します。なお、国際会計基準（IAS）第39号のヘッジ会計を継続して適用するオプションを選択しています。

金融資産の減損

当社グループは、償却原価で測定する金融資産にかかる減損について、各報告日において、測定する金融資産にかかる信用リスクが当初認識以降に著しく増大しているかを評価することにより、当該金融資産にかかる予想信用損失に対して貸倒引当金を認識します。

当初認識以降に当該金融資産にかかる信用リスクが著しく増大していない場合には、報告期間の末日後12ヵ月以内に生じ得る債務不履行事象から生じる予想信用損失（12ヵ月の予想信用損失）に基づき貸倒引当金を測定します。一方、当初認識以降に当該金融資産にかかる信用リスクが著しく増大している場合または金融資産が信用減損している場合、予想信用損失にかかる引当金は、当該金融資産の予想存続期間にわたるすべての生じ得る債務不履行事象から生じる予想信用損失（全期間の予想信用損失）に基づいて計算されます。ただし、売上債権などの営業債権および契約資産については常に全期間の予想信用損失に等しい金額で貸倒引当金を測定します。

信用リスクが著しく増大しているか否かは、債務不履行発生のリスクの変動に基づき判断し、債務不履行発生のリスクに変動があるかの判断にあたっては、深刻な財政困難、契約違反、債務者が破産または他の財務上の再編を行う可能性の増加を考慮します。貸倒引当金繰入額および戻入額は、純損益で認識します。

② 非金融資産

(a) 棚卸資産

棚卸資産の評価額は、取得原価と正味実現可能価額のいずれか低い金額で測定します。棚卸資産の測定において、代替性がある場合には先入先出法または総平均法により測定し、代替性がない場合には個別法により測定します。

取得原価には、棚卸資産の取得にかかる費用、製造費および加工費、ならびに当該棚卸資産を現在の場所および状態とするまでに要したその他の費用が含まれます。製造棚卸資産および仕掛品については、正常操業度に基づく製造間接費の適切な配賦額を含めます。

正味実現可能価額は、通常の事業の過程における見積売価から、完成までに要する見積原価および販売に要する見積販売費用を控除した額です。

(b) 有形固定資産

有形固定資産は、取得原価から減価償却累計額および減損損失累計額を控除した額で測定します。

取得原価には資産の取得に直接関連する費用、解体・除去費用および土地の原状回復費用、ならびに資産計上すべき借入コストが含まれます。有形固定資産の重要な構成要素の耐用年数が構成要素ごとに異なる場合、それぞれ別個(主要構成要素)の有形固定資産項目として会計処理します。有形固定資産の処分損益は、純損益で認識します。

(c) 無形資産

のれん

子会社の取得により認識されるのれんは、個別に識別されない他の資産とともに発生する将来の経済的便益を表す資産です。のれんは償却を行わず、少なくとも年に1回およびのれんが配分された資金生成単位について減損の兆候がある場合にはその都度、減損テストを行います。当社グループは、移転された対価、被取得企業のすべての非支配持分の金額、および従来保有していた被取得企業の資本持分の取得日公正価値の総額が、取得した識別可能な資産および引き受けた負債の正味金額を超過する額としてのれんを当初測定します。当該金額の総計が被取得企業の識別可能資産および引受負債の正味金額を下回る場合、その差額は割安購入益として純損益で認識します。

ソフトウェアおよびその他の無形資産

市場販売目的のソフトウェアおよび自社利用目的のソフトウェアの開発費用は、以下のすべてを立証できる場合に限り、無形資産として資産計上します。

- ・使用または売却できるように無形資産を完成させることの技術上の実行可能性
- ・無形資産を完成させ、さらにそれを使用または売却するという企業の意図
- ・無形資産を使用または売却する能力
- ・無形資産が可能性の高い将来の経済的便益を創出する方法
- ・無形資産の開発を完成させ、さらにそれを使用または売却するために必要となる、適切な技術上、財務上およびその他の資源の利用可能性
- ・開発期間中に無形資産に起因する支出を、信頼性をもって測定できる能力

特許権やライセンス等のその他の無形資産は、取得時に取得価額で認識します。企業結合により取得し、のれんとは区分して認識した資産化された開発費等の無形資産は取得日の公正価値で計上します。

耐用年数を確定できる無形資産の償却方法、耐用年数および残存価額は、各報告期間の末日に見直しを行い、必要に応じて変更します。

(d) 減損

当社グループは、各報告期間の末日現在、棚卸資産、繰延税金資産、売却目的で保有する資産、従業員給付から生じる資産、契約資産、および顧客との契約獲得のためのコストから生じる資産を除く非金融資産の帳簿価額が減損している可能性を示す兆候の有無を判定します。当該判定は、資産または資金生成単位について行われます。資金生成単位は、他の資産または資産グループのキャッシュ・インフローから、概ね独立したキャッシュ・インフローを生み出す最小の資産グループです。減損損失は純損益で認識し、帳簿価額はその回収可能価額まで減額します。回収可能価額は、資産が他の資産または資産グループから、概ね独立したキャッシュ・インフローを生成しない場合を除き、個別の資産または資金生成単位ごとに決定します。当社グループの全社資産は独立したキャッシュ・インフローを生み出さないため、全社資産に減損の兆候がある場合、全社資産が帰属する資金生成単位について回収可能価額を算定します。全社資産は、のれん以外の資産で、検討の対象である資金生成単位と他の資金生成単位の双方のキャッシュ・インフローに寄与する資産をいい、間接部門で保有する土地や建物が含まれます。

回収可能価額は、資産または資金生成単位の処分費用控除後の公正価値と使用価値のいずれか高い金額とします。使用価値とは、資産または資金生成単位から生じると見込まれる将来キャッシュ・フローの現在価値です。使用価値の算定において、見積将来キャッシュ・フローは、その資金生成単位が属する国、産業の状況を勘案して決定した成長率に基づき作成し、貨幣の時間的価値および当該資産または資金生成単位に固有のリスクを反映した税引前の割引率を用いて現在価値に割引きます。

のれんおよび耐用年数を確定できない無形資産は、毎年同時期に、のれんおよび耐用年数を確定できない無形資産が配分された資金生成単位のレベルで回収可能価額の見積りを行います。上記の他、減損の兆候がある場合にはその都度、減損テストを行います。

(2) 重要な資産の減価償却の方法

① 有形固定資産

主に定額法を採用しています。

主な耐用年数は次のとおりです。

建物及び構築物 7～60年 機械及び装置 2～22年 工具、器具及び備品 2～20年

なお、使用権資産については、リース期間または当該資産の見積耐用年数のいずれか短い期間で減価償却します。

② 無形資産

市場販売目的のソフトウェア……見込有効期間における見込販売数量に基づく償却方法

(主として1～9年)

なお、見込販売数量に基づく償却が将来の経済的便益が消費されるパターンを反映しない場合には、残存耐用年数にわたって定額法にて償却します。

自社利用目的のソフトウェア……社内における見込利用可能期間(主として3～5年)に基づく定額法

その他の無形資産……当該資産が使用可能な状態になった日から契約期間等の見積耐用年数にわたり、将来の経済的便益が消費されるパターンを反映する方法によって償却します。

(3) 重要な引当金の計上基準

引当金は、当社グループが過去の事象の結果として現在の債務(法的または推定的)を有しており、当該債務を決済するために経済的便益を有する資源の流出が生じる可能性が高く、当該債務の金額について信頼できる見積りが可能である場合に認識します。

(4) 重要な収益および費用の計上基準

当社グループは、下記の5ステップアプローチにより収益を認識します。(IFRS第9号「金融商品」に基づく利息および配当収益等ならびにIFRS第16号「リース」に基づく受取りリース料を除く。)

ステップ1：顧客との契約を識別する

ステップ2：契約における履行義務を識別する

ステップ3：取引価格を算定する

ステップ4：取引価格を契約における履行義務に配分する

ステップ5：履行義務の充足時に（または充足するにつれて）収益を認識する

当社グループは、ハードウェアおよびパッケージソフトウェアの提供に関する契約、ならびに役務の提供およびシステム・インテグレーション/工事に関わる顧客との契約から収益を認識します。これらの契約から当社グループは別個の約束された財またはサービス（履行義務等）を特定し、それらの履行義務に対応して収益を配分します。

ハードウェアおよびパッケージソフトウェアの提供に関する契約において、当社グループは、支配が顧客に移転したと判断した時点で収益を認識します。据付等の重要なサービスを要するハードウェアの販売による売上収益は、原則として、顧客の検収時に認識します。標準的なハードウェアの販売による売上収益は、原則として、当該ハードウェアに対する支配が顧客に移転する引渡時に認識します。

役務の提供およびシステム・インテグレーション/工事に関わる顧客との契約において、当社グループは、一定の期間にわたり履行義務を充足するにつれて、収益を認識します。サービスの提供の売上収益は、履行義務の完全な充足に向けた進捗度を合理的に測定できる場合は進捗度の測定に基づいて、進捗度を合理的に測定できない場合は履行義務の結果を合理的に測定できるようになるまで発生したコストの範囲で、認識します。

継続して役務の提供を行うサービス契約は、サービスが提供される期間に対する提供済期間の割合で進捗度を測定する方法に基づいて売上収益を認識します。単位あたりで課金するアウトソーシング・サービスは、サービスの提供が完了し、請求可能となった時点で売上収益を認識します。時間単位で課金されるサービスは、サービス契約期間にわたり売上収益を認識します。メンテナンスは原則としてサービスが履行される期間にわたり売上収益を認識しますが、時間単位で課金する契約については実績金額をもとに売上収益を認識します。

(5) リース

当社グループは、契約時に、その契約がリースであるか、またはその契約にリースが含まれているかを判定します。契約が特定された資産の使用を支配する権利を一定期間にわたり対価と交換に移転する場合には、その契約はリースまたはリースを含んでいます。また、当社グループは、リース期間が12ヵ月以内の短期リースおよび原資産が少額であるリースについて、使用権資産およびリース負債を認識しないことを選択しています。これらのリースに関して、当社グループは、リース料をリース期間にわたり定額法により費用として認識します。

借手のリース

当社グループは、リースの開始日において、原資産を使用する権利を表す使用権資産およびリース料の支払義務を表すリース負債を認識します。

リース負債は、開始日に支払われていないリース料の現在価値で測定します。そのリース料は、リースの計算利率が容易に算定できる場合には、計算利率を用いて割り引きますが、計算利率が容易に算定できない場合には、借手の追加借入利率を用いて割り引きます。

リース負債の測定に含まれるリース料は、次の額で構成されます。

- ・固定リース料（実質上の固定リース料を含む）
- ・変動リース料のうち、指数またはレートに応じて決まる金額（当初測定には開始日現在の指数またはレートを使用）
- ・残価保証に基づいて当社グループが支払うと見込まれる金額
- ・購入オプションおよび延長オプションを当社グループが行使することが合理的に確実である場合

の、当該オプションの行使価格

- ・リースの解約に対するペナルティの支払額（当社グループが解約オプションを行使しないことが合理的に確実である場合を除く）

リース負債は、実効金利法に基づく償却原価で事後測定し、指数またはレートの変動、残価保証に基づく当社グループの見積支払額、または当社グループが購入オプション、延長オプションまたは解約オプションを行使するかの判定の変更により、将来のリース料の変動が発生した場合に再測定されます。

なお、建物のリース契約の多くは、借手が延長オプションを借手の裁量で行使可能な契約となっておりますが、当該オプションを行使することが合理的に確実と評価した期間にかかるリース料のみをリース負債の測定に含めています。

使用権資産は、リース負債の当初測定額に、開始日以前に支払ったリース料等を調整した額で当初測定し、開始日から原資産の耐用年数の終了時またはリース期間の終了時のいずれか短い期間にわたり定額法により減価償却します。原資産の見積耐用年数はその有形固定資産の見積耐用年数と整合するよう決定されます。また、開始日後は、使用権資産は、取得原価から減価償却累計額および減損損失累計額を控除し、リース負債の再測定について調整した額で測定されます。使用権資産は、連結財政状態計算書において、「有形固定資産」に含めて表示されています。

(6) その他連結計算書類の作成のための基本となる重要な事項

① 確定給付型制度

当社グループの確定給付型制度には、確定給付型年金制度および退職一時金制度が含まれます。確定給付型制度にかかる負債または資産の純額は、確定給付制度債務の現在価値から、制度資産の公正価値を控除します。当社グループは確定給付制度債務を、制度ごとに区別して、従業員が過年度および当連結会計年度において提供した勤務の対価として獲得した将来給付額を見積り、当該金額を現在価値に割り引くことによって算定します。割引率は、上記債務と概ね同じ満期日を有するもので、かつ、支払見込給付と同じ通貨建ての、報告期間の末日における優良社債の利回りによります。確定給付制度の再測定はその純額を一括してその他の包括利益で認識し、その後利益剰余金への振替は行いません。

② グループ通算制度の適用

グループ通算制度を適用しています。

II 会計上の見積りに関する注記

会計上の見積りは、連結計算書類作成時に入手可能な情報に基づいて合理的な金額を算出しています。当連結会計年度の連結計算書類に計上した金額が会計上の見積りによるもののうち、翌連結会計年度の連結計算書類に重要な影響を及ぼすリスクがある項目は次のとおりです。

1. 繰延税金資産の回収可能性の評価

(1) 当連結会計年度の連結計算書類に計上した金額

当連結会計年度の連結財政状態計算書において繰延税金資産159,930百万円を計上しています。

(2) 会計上の見積りの内容について連結計算書類利用者の理解に資するその他の情報

繰延税金資産は、税務上の繰越欠損金及び将来減算一時差異に対して利用できる課税所得が発生すると見込まれる範囲内で計上しています。

当該繰延税金資産の回収可能性は、一時差異等の解消タイミングを含めた将来課税所得の発生見込に基づいていますが、その基礎となる将来の業績予測は、DX（デジタルトランスフォーメーション）のようなIT基盤に係る投資の拡大を含む国内市場の需要予測を考慮した将来の収益性等を主要な仮定として織り込んでいます。

これらの仮定は市況やその他の環境悪化により不確実性を伴い、将来課税所得の発生が見積りよりも低いと見込まれる場合には、回収可能と考えられる繰延税金資産の額が減額される可能性があります。

2. その他の会計上の見積り

繰延税金資産の回収可能性の評価以外の会計上の見積りの内容については、以下に記載しています。

(1) 金融商品の公正価値

V 金融商品に関する注記

(2) 非金融資産の減損テストにおける回収可能価額

I 連結計算書類の作成のための基本となる重要な事項に関する注記等

4. 会計方針に関する事項 (1) 重要な資産の評価基準および評価方法

(3) 退職後給付の数理計算上の仮定

I 連結計算書類の作成のための基本となる重要な事項に関する注記等

4. 会計方針に関する事項 (6) その他連結計算書類の作成のための基本となる重要な事項

(4) 引当金の認識および測定

I 連結計算書類の作成のための基本となる重要な事項に関する注記等

4. 会計方針に関する事項 (3) 重要な引当金の計上基準

(5) 収益認識

I 連結計算書類の作成のための基本となる重要な事項に関する注記等

4. 会計方針に関する事項 (4) 重要な収益および費用の計上基準

(6) リースの識別およびリース期間の決定

I 連結計算書類の作成のための基本となる重要な事項に関する注記等

4. 会計方針に関する事項 (5) リース

Ⅲ 連結財政状態計算書に関する注記

1. 資産から直接控除した貸倒引当金	
流動資産	4,899百万円
非流動資産	2,887百万円
合計	7,786百万円
2. 有形固定資産の減価償却累計額	1,105,332百万円

Ⅳ 連結持分変動計算書に関する注記

- 当連結会計年度末の発行済株式の種類および総数
普通株式 272,849,863株
- 配当に関する事項
(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日
2022年5月12日 取締役会	普通株式	13,642	50	2022年3月31日	2022年6月1日

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日
2022年10月28日 取締役会	普通株式	14,907	55	2022年9月30日	2022年12月1日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当金の原資	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額 (円)	基準日	効力発生日
2023年5月11日 取締役会	普通株式	利益剰余金	14,665	55	2023年3月31日	2023年6月1日

V 金融商品に関する注記

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 資本管理

当社グループは、資本効率を重視した事業運営を行うとともに、成長領域への投資や財務基盤の充実をはかることが長期的な企業価値の創出につながると考えています。財務基盤の充実については、ネットD/Eレシオを管理対象としています。

(2) 財務上のリスク管理

当社グループは、様々な国や地域で事業活動を行っており、その過程において、信用リスク、流動性リスク、市場リスク(主に金利リスクおよび為替リスク)等のリスクに晒されています。当社グループは、これらの財務上のリスクが、当社グループの財政状態および業績に与える影響を軽減するため、リスク管理を行っています。

①信用リスク

信用リスクは、取引先の債務不履行等により、当社グループに財務上の損失を発生するリスクであり、主に営業債権から生じます。

当社グループは、取引先の財政状況および期日経過残高をモニタリングし、財務状況等の悪化等による債務不履行リスクの軽減を図っています。また、必要な場合には担保取得等の保全措置も行っています。

デリバティブ取引、預金取引および短期投資目的の金融資産の購入にあたっては、カウンターパーティーリスクを軽減するために、信用力の高い金融機関と取引を行っています。

連結財政状態計算書で表示している保証債務および信用リスクに晒されている金融商品の帳簿価額の合計は、報告期間の末日において保有する担保およびその他の信用補完を考慮に入れない信用リスクに対する最大エクスポージャーを表しています。

営業債権及びその他の債権ならびに契約資産にかかる信用リスクエクスポージャー

当社グループの営業債権及びその他の債権等は主に国内の顧客によるものです。営業債権及びその他の債権ならびに契約資産は常に全期間の予想信用損失をもって貸倒引当金を算定しています。これらの資産については、信用リスクの特徴が類似する資産ごとにグルーピングし、過去の貸倒実績に現在の状況および将来の経済状況の予測を考慮して予想信用損失を測定しています。信用減損金融資産の予想信用損失は個別の債権ごとに算定しています。

②流動性リスク

流動性リスクは、当社グループが、現金または他の金融資産を引き渡すことにより決済される金融負債に関連する債務を履行するにあたり困難に直面するリスクです。当社グループの流動性管理アプローチは、決済支払期日に支払いを実行するための十分な流動性を確保することです。

当社グループは、現金及び現金同等物とコミットメントライン契約の未使用額との合計額の水準を、今後の事業活動のために必要である金融負債の想定支払金額を超過するよう、適時に資金繰計画を更新しています。

③市場リスク

(a)金利リスク

長期借入金等の、変動金利の有利子負債は金利の変動リスクに晒されています。当社グループは、金利の変動によるキャッシュ・フローの変動の影響を回避する目的で、金利スワップ取引を利用することがあります。

(b)為替リスク

当社グループは、グローバルな事業展開を行っているため、外国為替相場変動のリスクに晒されています。当社グループでは、これらの為替の変動リスクに対して、外貨建て営業債権債務を相殺することに加え、予定取引を含む正味のエクスポージャーに対して先物為替予約等を利用したヘッ

ジ取引を行うことにより、リスクを軽減しています。

(c) 株価変動リスク

当社グループは、業務上の関係を有する企業の上場株式を保有しており、資本性金融商品の株価変動リスクに晒されています。これらの資本性金融商品は、経営戦略、取引先や事業提携先との関係等を総合的に勘案し、当社グループの中長期的な企業価値向上に資すると判断する場合に保有するものです。

2. 金融資産及び金融負債の公正価値に関する事項

金融資産及び金融負債の公正価値		(単位 百万円)
	帳簿価額	公正価値
償却原価で測定する金融負債		
社債	234,389	232,268
長期借入金	126,392	126,017

上記の表に記載の資産および負債の公正価値のヒエラルキーは、社債がレベル2、長期借入金がレベル3です。なお、帳簿価額が公正価値の合理的な近似値となっている金融商品は上記の表には含めていません。また、経常的に公正価値で測定する金融商品についても、公正価値は帳簿価額と一致することから、上記の表には含めていません。

金融商品の公正価値算定方法

現金及び現金同等物、営業債権及びその他の債権、営業債務及びその他の債務ならびに未払費用は、主に短期間で決済され、帳簿価額は公正価値に近似していることから、公正価値は当該帳簿価額によって算定しています。

貸付金の公正価値は、満期までの期間および信用リスクを加味した利率を基に、将来予測されるキャッシュ・フローを現在価値に割り引いて算定しています。

その他の包括利益を通じて公正価値で測定する資本性金融商品および純損益を通じて公正価値で測定する資本性金融商品のうち、上場株式の公正価値は取引所の市場価格によって算定しています。また、活発な市場のない資本性金融商品の公正価値は類似会社比準法等の適切な評価方法によって算定しています。

デリバティブ資産および負債の公正価値のうち、為替予約取引の公正価値は期末日の先物為替相場により算定し、金利スワップの公正価値については、報告期間の末日における金利を基に、将来予測されるキャッシュ・フローを現在価値に割り引いて算定しています。

短期借入金および長期借入金(1年内返済予定)は、短期間で決済され、帳簿価額は公正価値に近似していることから、公正価値は当該帳簿価額によって算定しています。

長期借入金(1年内返済予定を除く)は、新規に同様の借入を実行した場合に想定される利率を基に、将来予測されるキャッシュ・フローを現在価値に割り引いて算定しています。

社債の公正価値は、活発でない市場における市場価格に基づいて算定しています。

3. 公正価値ヒエラルキー

公正価値で測定する金融資産および金融負債について、公正価値の測定に利用するヒエラルキーおよびその分類は次のとおりです。

レベル1：活発な市場における同一の資産または負債の公表価格

レベル2：レベル1に分類される公表価格以外の、金融資産および金融負債に関して直接的または間接的に観察可能なインプット

レベル3：観察可能な市場データに基づかない観察不能なインプット

経常的に公正価値で測定する金融資産および負債の公正価値ヒエラルキーに基づくレベル別分類は、次のとおりです。

(単位：百万円)

	レベル1	レベル2	レベル3	合計
純損益を通じて公正価値で測定する金融資産	451	2,304	17,790	20,545
その他の包括利益を通じて公正価値で測定する資本性金融商品	46,515	—	94,224	140,739
純損益を通じて公正価値で測定する金融負債	—	7,151	—	7,151

当社グループは、投資先との取引関係の維持、強化による収益基盤の拡大を目的とする長期保有の株式について、その他の包括利益を通じて公正価値で測定する資本性金融商品に指定しています。なお、レベル3に分類されている金融資産は、主に非上場株式により構成されており、レベル3に分類される金融資産および金融負債の公正価値評価については関連する社内規程に基づき、経理部内の適切な権限者によるレビューおよび承認を受けています。

VI 収益認識に関する注記

1. 収益の分解

当社グループの売上収益は、「ハードウェアおよびパッケージソフトウェアの提供」「サービス提供契約（アウトソーシング・保守を含む）」「システム・インテグレーションおよび工事契約」の3つの種類に分解し認識します。

財またはサービスの種類別に分解された売上収益の金額はそれぞれ1,033,576百万円、1,226,063百万円および1,053,379百万円です。

2. 収益を理解するための基礎となる情報

「4. 会計方針に関する事項」の「(4) 重要な収益および費用の計上基準」に記載のとおりです。

3. 当連結会計年度および翌連結会計年度以降の収益の金額を理解するための情報

当連結会計年度末における未充足（または部分的に未充足）の履行義務に配分された取引価格の金額は2,092,190百万円であり、当該金額には、1年超の長期にわたって実現する履行義務が含まれています。

なお、当初の予想期間が1年以内の契約の一部である場合は上記の履行義務から除いています。

VII 1株当たり情報に関する注記

1株当たり親会社所有者帰属持分	6,096円59銭
基本的1株当たり当期利益	424円51銭
希薄化後1株当たり当期利益	424円50銭

株主資本等変動計算書

(2022年 4月 1日から
2023年 3月31日まで)

(単位 百万円)

	株主資本							
	資本金	資本剰余金			利益剰余金			
		資本準備金	その他剰余金	資本剰余金合計	利益準備金	その他剰余金	繰越利益剰余金	剰余金合計
					オープンイノベーション促進積立金			
当期首残高	427,831	89,892	46,771	136,662	15,514	—	378,177	393,691
当期変動額								
オープンイノベーション促進積立金の積立						250	△250	—
剰余金の配当							△28,549	△28,549
利益準備金の積立					1,552		△1,552	—
当期純利益							102,109	102,109
自己株式の取得								
自己株式の処分			1	1				
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)								
当期変動額合計	—	—	1	1	1,552	250	71,758	73,560
当期末残高	427,831	89,892	46,772	136,663	17,066	250	449,935	467,251

	株主資本		評価・換算差額等			純資産計
	自己株式	株主資本計	その他証券評価差額金	繰延ヘッジ損益	評価・換算差額等合計	
当期首残高	△1,891	956,293	23,050	△3,084	19,966	976,260
当期変動額						
オープンイノベーション促進積立金の積立		—				—
剰余金の配当		△28,549				△28,549
利益準備金の積立		—				—
当期純利益		102,109				102,109
自己株式の取得	△30,547	△30,547				△30,547
自己株式の処分	865	866				866
株主資本以外の項目の当期変動額(純額)			△3,131	105	△3,027	△3,027
当期変動額合計	△29,682	43,880	△3,131	105	△3,027	40,853
当期末残高	△31,573	1,000,173	19,919	△2,979	16,940	1,017,113

個別注記表

I 重要な会計方針に係る事項に関する注記

1. 記載金額は百万円未満を四捨五入して表示しています。

2. 重要な会計方針

(1) 資産の評価基準および評価方法

① 有価証券の評価基準および評価方法

子会社株式および関連会社株式……………移動平均法による原価法

その他有価証券

- ・市場価格のない株式等以外のもの……………時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）
- ・市場価格のない株式等……………移動平均法による原価法
- ・投資事業有限責任組合等への出資……………入手可能な直近の決算書に基づき持分相当額を純額で取り込む方法によっています。

② デリバティブの評価基準および評価方法

時価法

③ 棚卸資産の評価基準および評価方法

評価基準は下記の評価方法に基づく原価法（貸借対照表価額については収益性の低下に基づく簿価切下げの方法）を採用しています。

- ・商品及び製品
注文生産品……………個別法
標準量産品……………先入先出法
- ・仕掛品
注文生産品……………個別法
標準量産品……………総平均法
- ・原材料及び貯蔵品……………先入先出法

(2) 固定資産の減価償却の方法

① 有形固定資産……………定額法

主な耐用年数は次のとおりです。

建物	8～50年
構築物	7～60年
機械及び装置	4～22年
工具、器具及び備品	2～15年

② 無形固定資産……………定額法

なお、市場販売目的のソフトウェアについては、見込販売数量または見込販売収益に基づく償却方法（見込有効期間2年以内）を採用し、自社利用のソフトウェアについては、社内における見込利用可能期間（5年以内）に基づく定額法を採用しています。

③ 長期前払費用

定額法または販売実績等に基づいた償却を行っています。

(3) 引当金の計上基準

貸倒引当金	債権の貸倒れによる損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しています。
製品保証引当金	製品販売後または受託開発プログラム引渡後の無償修理費用の支出に備えるため、売上高等に対する過去の実績率および個別に追加原価の発生可能性を基礎とした見積額を計上しています。
役員賞与引当金	役員賞与の支出に備えるため、当事業年度における支給見込額を計上しています。
工事契約等損失引当金	採算性の悪化した受注制作のソフトウェアおよび工事契約等に係る将来の損失に備えるため、翌事業年度以降に発生することとなる損失見込額を計上しています。
債務保証損失引当金	関係会社への債務保証等に係る損失に備えるため、被保証者の財政状態等を勘案し、損失負担見込額を計上しています。
偶発損失引当金	訴訟や係争案件等の将来発生する可能性のある偶発損失に備えるため、偶発事象ごとに個別のリスクを検討し、合理的に算定した損失見込額を計上しています。
退職給付引当金または前払年金費用	<p>当社は退職給付制度として、確定給付型の企業年金基金制度、確定拠出年金制度および退職一時金制度を採用しています。</p> <p>従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務および年金資産の見込額に基づき、当事業年度末において発生していると認められる額を退職給付引当金または前払年金費用として計上しています。</p> <p>当社は退職給付債務を、制度ごとに区別して、従業員が過年度および当事業年度において提供した勤務の対価として獲得した将来給付額を見積り、当該金額を現在価値に割り引くことによって算定します。割引率は、上記債務と概ね同じ満期日を有するもので、かつ、支払見込給付と同じ通貨建ての、事業年度の末日における優良社債の利回り（計算基礎に重要な変動が生じていない場合には、前事業年度までに基礎としていた利回り）によります。</p> <p>退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準を採用しています。</p> <p>数理計算上の差異は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間（主として13年）による定額法により翌事業年度から費用処理しています。</p>

(4) 収益および費用の計上基準

当社は、下記の5ステップアプローチにより収益を認識します。

- ステップ1：顧客との契約を識別する
- ステップ2：契約における履行義務を識別する
- ステップ3：取引価格を算定する
- ステップ4：取引価格を契約における履行義務に配分する
- ステップ5：履行義務の充足時に（または充足するにつれて）収益を認識する

当社は、ハードウェアおよびパッケージソフトウェアの提供に関する契約、ならびに役務の提供およびシステム・インテグレーション/工事に関わる顧客との契約から収益を認識します。これらの契約から当社は別個の約束された財またはサービス（履行義務等）を特定し、それらの履行義務に対応して収益を配分します。

ハードウェアおよびパッケージソフトウェアの提供に関する契約において、当社は、支配が顧客に移転したと判断した時点で収益を認識します。据付等の重要なサービスを要するハードウェアの販売による売上高は、原則として、顧客の検収時に認識します。標準的なハードウェアの販売による売上高は、原則として、当該ハードウェアに対する支配が顧客に移転する引渡時に認識します。

役務の提供およびシステム・インテグレーション/工事に関わる顧客との契約において、当社は、一定の期間にわたり履行義務を充足するにつれて、収益を認識します。サービスの提供の売上高は、履行義務の完全な充足に向けた進捗度を合理的に測定できる場合は進捗度の測定に基づいて、進捗度を合理的に測定できない場合は履行義務の結果を合理的に測定できるようになるまで発生したコストの範囲で、認識します。

継続して役務の提供を行うサービス契約は、サービスが提供される期間に対する提供済期間の割合で進捗度を測定する方法に基づいて売上高を認識します。単位あたりで課金するアウトソーシング・サービスは、サービスの提供が完了し、請求可能となった時点で売上高を認識します。時間単位で課金されるサービスは、サービス契約期間にわたり売上高を認識します。メンテナンスは原則としてサービスが履行される期間にわたり売上高を認識しますが、時間単位で課金する契約については実績金額をもとに売上高を認識します。

(5) 外貨建の資産および負債の本邦通貨への換算基準

外貨建金銭債権債務は、期末日の直物為替相場により円貨に換算し、換算差額は損益として処理しています。

(6) ヘッジ会計の処理

① ヘッジ会計の処理

金利リスクおよび為替変動リスクをヘッジするデリバティブ取引につき、繰延ヘッジ処理を適用しています。

② ヘッジ手段とヘッジ対象

ヘッジ手段……………金利スワップおよび為替予約

ヘッジ対象……………社債および借入金、外貨建金銭債権債務および外貨建予定取引

③ ヘッジ方針

当社の内部規程である「リスク管理規程」に基づき、相場変動を相殺、またはキャッシュ・フローを固定する目的で、デリバティブ取引を利用しています。

④ ヘッジ有効性評価の方法

ヘッジ対象の相場変動またはキャッシュ・フロー変動の累計と、ヘッジ手段の相場変動またはキャッシュ・フロー変動の累計とを比較し、両者の変動額等を基礎にして判断しています。

(7) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異の会計処理の方法は、連結計算書類におけるこれらの会計処理の方法と異なっています。

(8) グループ通算制度の適用

グループ通算制度を適用しています。また、「グループ通算制度を適用する場合の会計処理及び開示に関する取扱い」(実務対応報告第42号 2021年8月12日)に従って、法人税及び地方法人税の会計処理又はこれらに関する税効果会計の会計処理並びに開示を行っています。

3. 表示方法の変更

前事業年度まで区分掲記していた営業外費用の「和解金及び損害賠償金」(当事業年度412百万円)は、重要性が乏しいため、営業外費用の「その他」に含めて表示しています。

II 会計上の見積りに関する注記

会計上の見積りは、計算書類作成時に入手可能な情報に基づいて合理的な金額を算出しています。当事業年度の計算書類に計上した金額が会計上の見積りによるもののうち、翌事業年度の計算書類に重要な影響を及ぼすリスクがある項目は次のとおりです。

1. 繰延税金資産の回収可能性の評価

(1) 当事業年度の計算書類に計上した金額

当事業年度の貸借対照表において繰延税金資産68,121百万円を計上し、当該金額は評価性引当金102,840百万円を控除しています。

(2) 会計上の見積りの内容について計算書類利用者の理解に資するその他の情報

連結注記表に記載しているため、記載を省略しています。

2. その他の会計上の見積り

繰延税金資産の回収可能性の評価以外の会計上の見積りの内容については、以下に記載しています。

(1) 退職後給付の数理計算上の仮定

I 重要な会計方針に係る事項に関する注記 2. 重要な会計方針 (3) 引当金の計上基準

(2) 引当金の認識および測定

I 重要な会計方針に係る事項に関する注記 2. 重要な会計方針 (3) 引当金の計上基準

(3) 収益認識

I 重要な会計方針に係る事項に関する注記 2. 重要な会計方針 (4) 収益および費用の計上基準

Ⅲ 貸借対照表に関する注記

1. 担保に供している資産	
投資有価証券	5百万円
関係会社株式	175百万円
関係会社長期貸付金	447百万円
合計	627百万円
2. 棚卸資産および工事契約等損失引当金の相殺表示	
損失が見込まれる工事契約等に係る棚卸資産は、これに対応する工事契約等損失引当金930百万円（うち、商品及び製品に係る工事契約等損失引当金492百万円、仕掛品に係る工事契約等損失引当金438百万円）を相殺表示しています。	
3. 有形固定資産の減価償却累計額	441,027百万円
4. 保証債務	
銀行借入金等に対する保証債務残高	
関係会社	28,655百万円
5. 関係会社に対する金銭債権および金銭債務	
短期金銭債権	173,827百万円
長期金銭債権	21,553百万円
短期金銭債務	533,651百万円
長期金銭債務	2,101百万円

Ⅳ 損益計算書に関する注記

関係会社との取引高	
営業取引による取引高	
売上高	235,244百万円
仕入高	955,609百万円
営業取引以外の取引による取引高	70,291百万円

Ⅴ 株主資本等変動計算書に関する注記

当事業年度の末日における自己株式の種類および株式数	
普通株式	6,500,367株

VI 税効果会計に関する注記

繰延税金資産および繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

繰延税金資産	
関係会社株式評価損	39,234百万円
退職給付引当金損金算入限度超過額	39,140百万円
投資有価証券評価損	26,396百万円
棚卸資産評価	18,132百万円
繰越欠損金	15,617百万円
未払賞与否認額	14,602百万円
減価償却超過額	11,661百万円
偶発損失引当金	7,682百万円
債務保証損失引当金	4,617百万円
未払費用	2,797百万円
製品保証引当金	1,984百万円
その他	25,480百万円
繰延税金資産 小計	207,341百万円
税務上の繰越欠損金に係る評価引当金	△13,262百万円
将来減算一時差異等の合計に係る評価引当金	△89,578百万円
評価引当金 小計	△102,840百万円
繰延税金資産 合計	104,501百万円
繰延税金負債	
退職給付信託解約に伴う有価証券取得	△17,098百万円
その他有価証券評価差額金	△8,682百万円
退職給付信託設定益	△8,496百万円
その他	△2,104百万円
繰延税金負債 合計	△36,380百万円
繰延税金資産の純額	68,121百万円

VII リースにより使用する固定資産に関する注記

オペレーティング・リース取引	
未経過リース料	
1年内	10,699百万円
1年超	32,897百万円
合計	43,596百万円

VII 関連当事者との取引に関する注記

子会社および関連会社等

種類	会社の名称	議決権等の所有 (被所有) 割合	関連当事者との関係	取引の内容	取引 金額	科目	期末 残高
子会社	NECソリューションイノベータ(株)	所有 直接100%	当社が販売する一部製品に関するソフトウェアの開発 役員の兼任	ソフトウェアの 開発委託 資金の預り	百万円 267,872 -	買掛金 預り金	百万円 97,099 百万円 77,697
子会社	NECプラットフォームズ(株)	所有 直接100%	当社が販売する一部製品の 供給 役員の兼任	製品の供給 製品および部品の代理購買 資金の貸付	百万円 264,639 百万円 77,785 -	買掛金 未収入金 その他	百万円 68,064 百万円 36,949 百万円 27,377
子会社	NECフィールドディング(株)	所有 直接100%	当社が販売する一部製品の 保守および販売 役員の兼任	資金の預り	-	預り金	百万円 59,449
子会社	NECファシリティーズ(株)	所有 直接100%	当社施設の設計、施工管理 および施設管理ならびに当 社および当社従業員に対す る保険の代理店業務 役員の兼任	資金の預り	-	預り金	百万円 26,217

1. NECプラットフォームズ(株)の科目欄の「その他」は、関係会社短期貸付金です。
2. 価格等の取引条件は、市場の実勢価格等を参考にして、その都度交渉により決定しています。
3. 子会社との資金取引は、主にキャッシュマネジメントシステムによるものです。

IX 1株当たり情報に関する注記

1株当たり純資産額	3,818円72銭
1株当たり当期純利益	378円57銭

X 収益認識に関する注記

顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報は、連結注記表「I 連結計算書類の作成のための基本となる重要な事項に関する注記等 4. 会計方針に関する事項 (4) 重要な収益および費用の計上基準」に同一の内容を記載しているため、注記を省略しています。